

学習の仕方と模試の活用法

Z会東大進学教室&Z進大学受験部の皆さん

Z会東大進学教室の宮原です。改めまして自己紹介しますと、以前(10年ほど前)は東大進学教室の前身である東大マスターコース、一昨年まではZ会の通信教育中学生・高校生向けコースの責任者をしていました。現在は関東地区・関西地区の高校受験・大学受験教室部門の担当役員をしております。過去教室・通信教育でたくさんの大学受験生の進路指導を担当してきた経験から、今年1年定期的に受験の参考になる情報をお届けしたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

さて、新学期がはじまり、そろそろ1ヶ月弱経ちました。学習のペースは掴めていますでしょうか？

大前提として、第一志望を固めること、そして(第一志望の)個別試験で使う科目については、塾や通信教育などの「1年間のカリキュラムを持った学習手段」で対策を進めることをぜひ意識してください。

世の中に学習手段はたくさんありますが、年間カリキュラムのある学習手段に乗っかるのが一番スムーズです(迷わずに学習を進めることができます)。参考書や問題集を中心とした学習が有効でないとは言いませんが、参考書や問題集には年間カリキュラムがありませんので、仮に1冊終わったあとの選択肢の分岐が複数存在し、うまく進めないと全体を網羅できなくなります。塾や通信教育、参考書や問題集は、それぞれ「有効な使い方」があり、参考書や問題集は「ピンポイントで弱点補強する」とか「(塾の授業でカバーできない)演習量をカバーする」とか「知識をインプットする」とかで有効に機能する学習手段です。その特性を理解した上で、うまく使い分けをしていきましょう。

また「一度決めた(年間カリキュラムありの)学習手段は変えない」こともぜひ念頭に置いて下さい。”隣の芝生は青く見える”もので、友達の学習手段の方がより有効なのではないか?と思うシーンもあるでしょうが、私の視点からすると、ある程度の実績のある学習手段であれば、やっているこ

とはそんなに大きくは変わりません(大半が、見せ方とか、説明の仕方が若干異なるだけです)。

大学入試は、知識を覚えたらずぐ成績が伸びるような単純な試験ではありませんので、じっくり腰を据えて学習に取り組む必要があります。特に現役生の皆さんは、入試で戦えるだけの「力をつける」時期ですので、ふらふらと学習手段を変えているようだと、とても入試本番には間に合いません(中学受験や高校受験より範囲が広いわけですし)。まずはこの1学期に、しっかり腰を据えて、「力をつける」ことに注力して下さい。

続いて、上記を前提とした「模試」の活用方法についてお伝えします。初めにお伝えすると、模試は「力を試す」ための手段です。「力をつける」時期においては、頻繁に「力を試し」てもあまり意味がないので、必要な模試をピンポイントで受けるとよいでしょう。以下、志望大学別に解説していきます。

【東大・京大志望者】

最優先で受けて欲しい模試は、駿台・Z会共催の「東大入試実戦模試」or「京大入試実戦模試」及び河合塾の「東大オープン」or「京大オープン」を各2回(夏・秋)の計4本です。この4本は母集団の質・人数とも本番にかなり近いのでその時点の力を試すよい試金石になります(なお、東大志望者が京大模試、京大志望者が東大模試を受ける必要はありません。あくまで志望している大学の模試を受けましょうという意味ですので、念のため…)。

さて、夏・秋でそれぞれ2本受けることを勧めている理由ですが、難易度・履修範囲・演習量・当日の時間配分の成否・思ったよりうまく行った／行かなかった…などの要素で片方A判定・片方D判定というケースが少なからず発生するからです。A判定の最低点とD判定の最高点を比較すると実はそんなに差がない(東大模試だと例年30～40点程度です)ことを受けてのものなのですが、受験生の視点からすると、A判定とD判定はだいぶ印象が異なるかと思えますので、2つ受験してしっかり課題を洗い出すのが無難です。

なお、1学期中の模試としては「第1回駿台全国模試」の受験をオススメ

します。こちらは東大京大以外にも東科大・一橋大・旧帝大・最難関医学部志望者が集まる模試です。現役生に取っては高卒生と一緒に受ける初めての模試であり、力を試すにもちょうどよい時期(5月末～6月頭)かなと思います。夏前には、東進や代ゼミの東大・京大模試もありますが、母集団は前述の実戦模試やオープンよりだいぶ劣りますし、特に現役生はまだ理科地歴を中心に「力をつける時期」ということで、無理に東大型の問題に取り組まなくてよいと私は考えます。高卒生中心に学習が進んでいる場合、「出題形式に慣れる」「時間配分に慣れる」など、受験目的が明確である場合は受けてもらってもOKですが、この時期に得点や判定を気にする必要はありませんので、理科・地歴が追いついていない現役生は、無理に冠模試を受けまくる必要はありません。

最後に、上記に加えて、共通テスト(マーク)模試を年間3～4本受けて下さい。特に今年は共通テストが大きく変わる年なので、情報対応や、国語などの新形式に慣れる意味でも、意識して多めに受ける(=試験会場で時間配分の試行錯誤をする)ことをおすすめします。

【東大・京大以外の冠模試がある大学(旧帝大、東科大、一橋大など)志望者】

東大・京大志望者同様に、駿台と河合塾の冠模試を軸に考えましょう。ただし、大学によって実施回数・時期はまちまちですので(以前と比べると本数減りました)、夏に1本(東進や代ゼミも含めて)・秋に1～2本(基本的に駿台・河合優先で良いと思います)というのが基本ラインです。

1学期中にも一部冠模試はありますが(ある程度学習のベースができている高卒生はよいものの)まだ「力をつける」時期の現役生には、本番の入試問題形式で「力を試す」のは早いかなというのが率直なところで、1学期中は東大京大同様に「第1回駿台全国」の受験で良いかと思えます。

なお、東京科学大医学部志望者ですが、2024年に実施予定の模試は、(現時点では)河合塾の東京科学大オープンのみのようなようです(東工大模試は東進のものがありますが)。医学部対応しているかはHPからはわからなかったのですが、仮に医学部対応している場合は、1学期:第1回駿台全国、夏:(後述の理由で)第1回東大実戦、秋:東京科学大オープンで良いかなと思います(*医学部対応していない場合は、秋を第2回駿台全

国に置き換えてください)。東大実戦を候補に入れた理由ですが、東大と配点が似ていること(英語120点+数学120点+理科60点×2)、東大理三からの志望変更が例年一定数あることを想定して、夏の東大模試を受験する方が一定数いることをうけてのものです。ただ、東京科学大では使わない国語がついてきますし、他の科目の出題傾向は違いますので、マストではありません。

*これに加えて、東大京大でも書きましたが、共通テスト(マーク)模試を年間3~4本は受けて下さい。理由は東大京大同様です。

早慶志望者は代ゼミ・駿台共催の「早大/慶大入試プレ」を推します。この模試に限らず、全般的に冠模試で重視したい要素は(「力を試す」目的からして)「母集団」と「出題形式」なのですが、この模試は早慶の学部ごとに細かく主題形式を揃えたものですので、早慶第一志望者であれば受験する意味があると思います(河合の早慶オープンは細かい学部対応になっていません)。また、母集団については、そもそも早慶の場合、国公立の併願組が早慶模試を受験しないので、受験者の理想を追い求めることに意味はないということもあります。

【冠模試がない大学(上記以外の国公立大など)の志望者】

それ以外の大学の志望者は、河合塾の全統記述模試がベースになりますが、意識を高く保つ意味で駿台全国模試を受験してもOKです。1学期は第1回全統記述か第1回駿台全国。夏以降は第2回全統記述か駿台・ベネッセ記述が候補となります。

以上、模試の種類と志望ごとに、受けて欲しい模試のおおよその目安をお伝えしました。学校や予備校で受験必須の模試が指定されていたり、スケジュールが地区や学校によってまちまちだったり、ケースバイケースで判断しなくてはいけないところもありますので、どの模試を受験すればいいか迷ったら、教室スタッフまでご相談ください。